

History Street Story ～にぎわいが記憶の付箋になる場所～



高野 祐太
Takano Yuta

指導教員：大内 宏友

History Street Story

～にぎわいが記憶の付箋になる場所～

Prologue

戦後 65 年を迎えて戦争経験者がいなくなりつつある現在、戦争の記憶は語り手をなく、メディアのみで語られ情報だけが独り歩きする時代になってきた。

学校で習う歴史の授業、テレビのコメンテーターの言葉、数ある戦争の映画や舞台……

何が本当で何が嘘なんだ？

居眠りしてしまえば、チャンネルを変えてしまえば出会うこともなくなるぐらいに儚い記憶になっていってしまうのではないだろうか。

ニュースを見ても、隣の国の人たちが一体何を怒っているのかすらわからない。

Museum Park Void



長いチューブ状の展示空間の最後のヴォイドの空間には桜並木の桜を一つだけ摘み取ったヴォイドの内部に接続される。戦争の空間を戦争展示や作品に触れた後で桜が散っている情景などが現れる空間。この時、「桜」という賑わいの象徴は「命」や「儚さ」などの象徴に転換される。日常で桜を見たとき、ここでの空間体験が想起される。

Concept

数多く世に出されいていて人々の関心も高かった。

しかし、戦争のメディアに触れてその時は感傷的な気分浸ったとしても、

日常に戻るとすぐに忘れ去ってしまい深く考える機会はないように思う。

戦争のメディアに触れた時に感じてたマイナスなポジティブを日常の情景からでも思い出せるような仕掛けを映画館や劇場など、メディアを発信する場所が持つことができれば、歴史が忘却されてしまうことはなくなるだろう。

そこで、人々が忘れてしまいがちな歴史に建築がそっと付箋を貼ってくれるような空間を提案する。

History Street Story

この建築の声に耳を傾けたとき、あなたの目に桜はどのように映るのでしょうか？